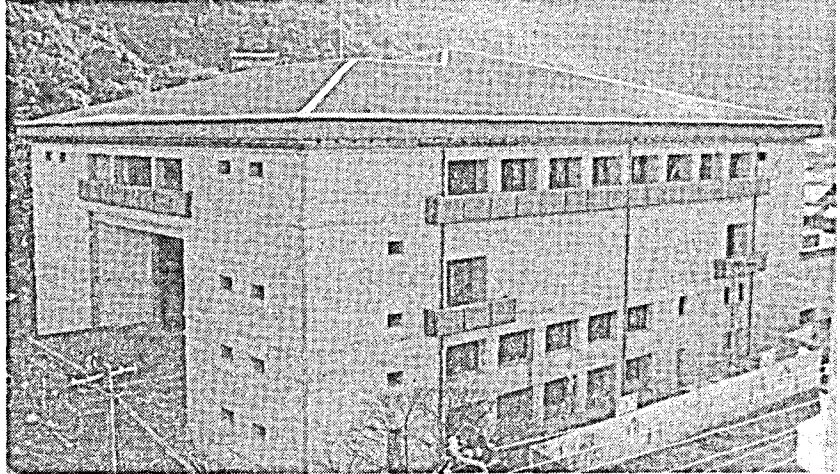
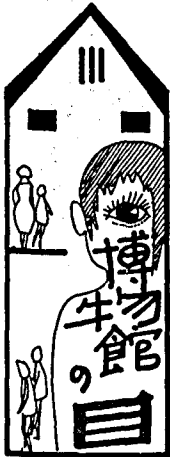


No. 72
1985.
11. 30

岐阜の博物館

▽501-32 関市小屋名
(百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL (05752) 8-3111(代)
振替 名古屋 6 37909



岐阜市歴史博物館 華麗にオープン!

岐阜市の歴史博物館が、去る11月1日、華やかに開館しました。大規模な公立博物館の誕生は、岐阜県博物館界にとっても、大きな飛躍の糧として、多大の期待が寄せられます。

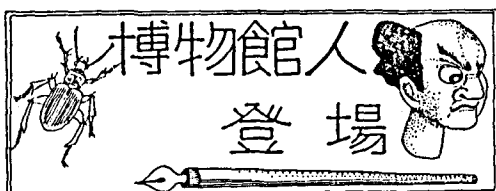
しかし、大規模で豪華な博物館が、全国各地に続々と誕生しても、館側自体も利用者側も、旧態依然たる運営や見学にとどまっているなら、入館者も年々減少することは明らかです。現に、全国各地の博物館の実状が、そのことを物語っています。年々新しい入館者をむかえ、活発な活動を展開する「栄えゆく博物館」とは、いったいどんな博物館像なのでしょう。

ちょうどタイミングよく、本紙P3~5に、博物館界の新しい変革の波「第三世代化の波」を紹介することができました。博物館が、施設でなく機関であるかぎり、それを生かすのも殺すのも、最大の生命線は「ヒト」にあります。絶え間ない調査研究活動を基盤に、資料収集・整理保存がなされ、そのうえで展示や各種教育活動がなされます。そのためには、博物館専門職員としての学芸関係職員には、長い実践体験と

特殊な専門技能が要求されます。博物館機能への認識不足、博物館の未発達、制度の不備、第三世代化への最大基盤は、博物館学芸員の職制確立と学芸員集団の確保といえます。

岐阜県内の某大学にあっても、いよいよ来春から、「学芸員」養成講座が開講されるとのニュースも伝わっています。資格を云々することよりも、問題は、学芸員も含め、息の長い地道な学芸活動を支える博物館人の増加こそが望まれます。めまぐるしく2~3年で転出入していたら、死に物狂いで学芸活動が望めないことは明らかです。全国的にみても、「栄えゆく館」「滅びゆく館」との分かれ目は、博物館人の質と量にあることは自明のことのようです。

豪華な建物、高価な実物資料があっても、博物館人不在ならば、市民・住民からそっぽむかれること間違いなしです。博物館人の質的な向上、自己研修が、厳しく求められる社会情勢となってきました。歴博の誕生は、その意味からも、大きな期待が寄せられます。(S.O.)



「私自身、中学生になる頃まで父の仕事に余り興味がありませんでした。けれど、父の体が弱かったので、手伝いで野鳥観察に野山をお供したりしていました。少しでも父に喜んでもらいたい気持ちだと思っています。父からほめられることはうれしいし、父の書いた文章が雑誌に載ると、いっしょうけんめい読んだものです。

雑誌「野鳥」が届くと、目次を覚え、父から資料をそろえる手伝いをする時、どこに何が書いてあるかわかるようにしました。父から「お前は、index(索引)だ」といわれていたんですよ。」

中学時代から父のところに野鳥研究家が集まり、自然にその中にとけ込んでいったようです。

「私は、一般の人よりは多少野鳥に詳しいだけです。」といわれるが、それだけでは、この館が飛驒の野鳥研究の中心になるはずがありません。

「父が死に、研究資料としての標本が多く残され、その整理をしているうちに、せっかく父が60年間かかって集めたものを、このまま埋れさせたくないと思うようになりました。岐阜県博物館が設立される頃で、そこへの寄贈も考えましたが、父の収集した鳥は飛驒が中心なので、やはりこの地で見てもらいたいと思ったことと、野鳥館があることにより、飛驒の野鳥の情報が集まってくることも期待していました。

また、どうやって鳥を展示したらよいか迷いましたね。横須賀・大阪などの自然史博物館へ見に行ったものです。」

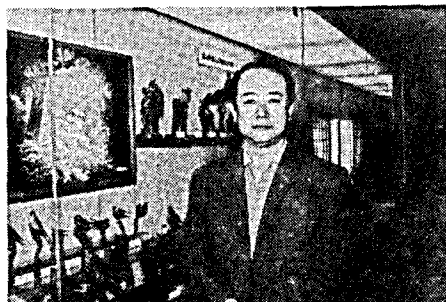
資料として収集した鳥を展示することになり、その準備をはじめたが、当然あるべき鳥がなく、メジロなど、極めて普通に見られる鳥の標本収集に苦労したそうです。

この館は、一般に開放されているだけでなく

老田野鳥館

おいだまさお
老田正夫氏

—父の遺志を継いで—



野鳥の会飛驒ブロックの事務局も置かれ、多くの野鳥に関心のある人が出入りされています。単なる見せるだけのものではなく、物と人が結びついている数少ない館です。野鳥の声を聞く会や夏休みの自然教室など、今後開催していきたいとのこと。本業に追われながらも夢は広がっています。

けれど心配なこともあります。それは、城山公園の鳥の将来です。

「このままでは城山はだめになる。何とか鳥の安心して住める公園にしたい。」

自分が自然保護員を務めた経験から、野鳥を守る厳しさを知り、城山公園の将来も、現在の体制の中では守れないことを痛感し、真に自然を理解する自然保護員を配置すること、県下に一人でもよいから権限を持ったレインジャー的な人を配置してくれたらと願っておられました。

この野鳥館を支えている人に和田美喜子さんがおられます。老田さんと共に、この館の運営に携わっておられ、飛驒の野鳥の編集を引き受け、自ら鳥の勉強をしながら、意欲的に取り組んでおられます。特に鳥の舌の図の説明はすばらしく、出版活動の大切さがうかがえます。

親子二代にわたる野鳥に対する情熱と、それを支えるスタッフ、野鳥を愛する人々のコミュニケーションがとれ、飛驒の野鳥に関する情報が集まってきています。博物館人として「この人ここにあればこそ」の野鳥館といえます。(S.A)

第三世代の博物館像をめざして

岐阜の博物館 編集委員会

瀧崎安之助記念館「各晴春華論叢」第3号、1985年3月に、「第三世代の博物館」と題する竹内順一氏の論文があります。入手困難な文献であり、博物館問題研究会よりコピーが送られてきました。日本の博物館界の現状を眺め、新しい時代に生き残る博物館づくりに役立つ、すばらしい問題提起となっています。その竹内順一氏の「第三世代の美術館」を受けて、伊藤寿朗氏が、「第三世代の博物館像」をまとめられました。県下の博物館界の実態を鳥瞰し、また会員各館園が、自館の活動内容を反省したりするのに、絶好の評価の窓となっています。竹内氏の論文を、編集委員会で抄録し、伊藤氏の整理された「第三世代の博物館像」はそのまま転載させていただきました。自館の活動評価、新しい時代に生きる博物館像をめざす研修資料として役立ててください。

★第三世代の博物館 — (竹内順一)より—

「博物館ブーム」という言葉がある。博物館がたくさんできて、その運営が旧態依然たるものであるならば、近い将来に市民からそっぽをむかれ、“開店休業”、館の運営の方向をはっきりさせなければ、多様化した市民の文化的な要求に応えられなくなるのではないか。館運営の明確なビジョンなしでスタートしたか、古くさく時代にそぐわない運営方針しか持ち合わせない館は、入館者数も減少傾向か伸び悩みで、私は「滅びゆく館」と呼んでいる。年々新しい入館者をむかえ、活発な活動を展開している館は、「栄えゆく館」である。博物館は今、新しい改革の必要に迫られ、この変革の波を「第三世代化の波」とよぶ。

◎第一世代の博物館

成立の根幹は“王室の宝”である。展示物の名称は、漢字と用語がむつかしすぎて意味がわからない。資料は公開されても、庶民にむかっ

て「見せてやる」方式で、館員の基本的姿勢は“宝の番人”であることを第一とする。建物の外観はいかめしく、館内はどことなく威圧感がある。

◎第二世代の博物館

豊富なコレクション・資料を、第三者に公開することを出発点としている。第一世代の館は、博物館法などの法律によって、一部の資料をしかたなしに公開し、保存という機能を第一にしてきたのに対し、“見せたい”のである。公報や宣伝活動・マスコミその他のパブリシティを重視している。館員は「学芸員」が第一線を形成する。所有資料の公開ばかりでなく、あるテーマを設定して、一つの新しい展覧「特別展」を行なう。第一世代の館が、パーマネント・コレクション中心に進められるのと大きなちがいを生む。「研究」という分野が生まれるのも第二世代の館からである。

◎第三世代の博物館

ただいま模索中であり、さまざまな検証を、現在の館運営に加えられた末に生まれる将来の館である。部分的にはあちこちで実施され始めている。「保存」「公開」→「参加」、地域住民が主役となり、「何かをする」こと。講演会を例にすれば、受講者がただ黙って聴衆者として存在するのではなく、シンポジウムのように参加者が自分の意見を述べるという形式になる。資料の収集面、博物館の図書利用、調査研究面まで、住民が館に「参加」する。

活動の全てが第一世代のままではなく、程度の差こそあれ、第一世代の館も第二世代の道を歩んでいる。現在の館の大部分は、第二世代に属するが、模索や検証を加えて、「第三世代の館」をつくり上げなければ、「滅びゆく館」となってしまう危機感がある。(注、論文全文入手希望の方は、編集委員会まで申し出て下さい。)

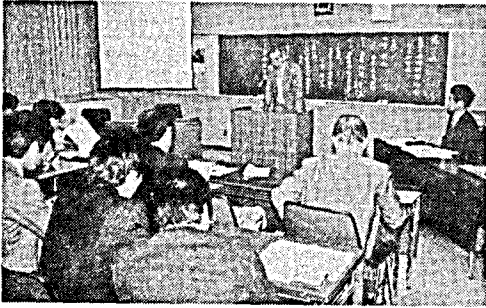
才三世代の博物館像 (伊藤寿朗)

| 項目 | 才一世代 | 才二世代 | 才三世代 |
|--|---|--|---|
| 目的 | 保存志向 | 公開志向 | 参加・体験志向 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・設立の理由 ・利用の形態 ・日常生活との関連 | <ul style="list-style-type: none"> ・宝物の保存施設 ・娯楽、観光 ・乖離(別の世界を提示) | <ul style="list-style-type: none"> ・町のシンボル・コレクションの寄贈・公開 ・一過性の見学 ・部分的関係(導入と保護) | <ul style="list-style-type: none"> ・地域社会の要請 ・継続的な活用 ・対象化(課題を提示) |
| 専門職員 | 番人 | 孤獨な学芸員 | 専門職集団(分業化とローテーション) |
| <ul style="list-style-type: none"> ・系列・規則上の位置 | なし | 行政職・事務職併用 | 専門職待遇 |
| 建物 | 倉庫中心 | 展示室中心 | 事業中心 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・設計の中心 | 威圧感を重視 | 外観を重視 | 機能を重視 |
| 調査・研究 | やらほい | 学芸員の個人的興味と関心の範囲 | 社員の要請に応えた調査・研究、市民との共同調査・研究の組織化とルールづくり。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・紀要 ・研究用施設 ・資料の研究用公開 ・研究用施設設備の開放 | <ul style="list-style-type: none"> ・なし ・なし ・やらほい ・もともとなし | <ul style="list-style-type: none"> ・学芸員の研究発表 ・事務室で兼用 ・知人だけに公開・援助 ・やらほい | <ul style="list-style-type: none"> ・市民の研究発表、共同調査・研究の発表 ・研究室、作業室を別置 ・資料の扱いのルールを指導したうえで"差別しほ" ・ルールを決めて研究室、実験設備等の開放 |
| 収集・保管 | 用館したときのまま | なんでも集めとく | 新しい価値を発見しながら集める |
| <ul style="list-style-type: none"> ・収集の記録 ・収集記録担当者 ・資料目録・索引 ・保存施設 ・保存・修復担当者 ・管理・警備 | <ul style="list-style-type: none"> ・資産台帳のみ ・いほい ・なし ・なし(すべて展示) ・職員の経験 ・宿直と監視員 | <ul style="list-style-type: none"> ・受付台帳中心 ・学芸員 ・一部年報等に記載 ・収蔵室満杯 ・外部委託、講習会 ・一部機械化と外部委託 | <ul style="list-style-type: none"> ・資料カード中心(登録可能な資料のみを収入れる) ・登録記録担当(レジスター) ・資料目録・索引が完備 ・余裕をもった収蔵室(増設可能なスペース) ・保存・修復専門職員 ・安全管理担当者と総合管理 |

| 公開・教育 | 展示のみ | 展示中心 | 事業中心 |
|--|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・展示のかたち | <ul style="list-style-type: none"> ・常設展のみ | <ul style="list-style-type: none"> ・常設展と特別展の組み合わせ | <ul style="list-style-type: none"> ・参加・体験型の展示(展示・鑑賞・鑑賞・鑑賞・鑑賞・鑑賞・鑑賞) |
| <ul style="list-style-type: none"> ・展示の内容 ・展示の量 ・図録(カATALOG) ・展示の解説 ・教育事業 ・教育事業担当者 ・講演会 ・映画会 ・視察会・見学会 ・学習施設設備の開放 ・友の会 | <ul style="list-style-type: none"> ・単品の価値中心 ・少数の室物 ・なし ・なし ・なし ・いい ・なし ・なし ・なし ・もともとなし ・なし | <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ中心・AV機器の活用 ・選択できるほどはない展示量 ・特別展図録(展示している資料の解説のみ) ・一部実施・一部展解説員(コンパニオン) ・一過性の事業中心 ・学芸員・臨時雇用のコンパニオン ・ときどきやるが参加者は受身 ・よくやる ・一過性のイベントとしてたまにやる ・集客室の開放程度 ・よくやるが参加者は受身(受益者団体化) | <ul style="list-style-type: none"> ・資料の多量な見方中心(鑑賞力の養成) ・選択できるだけの豊富な展示量 ・テーマに関する総合的な資料集(一冊書籍として整理可能な内容) ・レファレンス・コーナーの設置 ・継続的な事業中心 ・ミュージアム・エデュケーター ・問題提起を中心とするシンポジウムと記録の出版 ・館製作ビデオの常時利用 ・継続的な蓄積を重視しよくやる ・図書室・学習室・実験室・特別展示室の開放と充実 ・一定期間をへたら自主グループへの独立をうながす |
| 運 営 | 孤立・悠悠自適(関係者だけが対象) | 啓蒙的アピール(世間の無理解を嘆く) | 対社会的メッセージ(社会的存在を主張) |
| <ul style="list-style-type: none"> ・対社会的活動(パブリシティ) ・条例・審判行為 ・博物館協議会 ・年 報 ・休憩所 ・売 店 | <ul style="list-style-type: none"> ・やらない ・なし ・なし ・なし ・便所だけ ・なし | <ul style="list-style-type: none"> ・学芸員による部分的・一時的試み ・博物館法の引き直し ・文化財財源者を中心とし年数回の履合わせ ・事業報告中心 ・ソファールと灰皿程度 ・受付を兼ねた・絵ハガキと売れ残りの図録程度 | <ul style="list-style-type: none"> ・パブリシティ担当者による系統的実施と積極的な館のイメージづくり ・独自の目標を明記し、具体的方針を提起 ・市民意志の反映の場として、市民代表の参加と権限の行使を保障 ・博物館運営に関する問題提起・意見発表 ・レストラン・喫茶室 ・専門書をはじめ、なんでもそろっている充実したミュージアム・ショップ |

※ 竹内順一氏「オミ世代の美術館」の問題提起にもとづいて製作したもの。

天下三名泉の一つ 下呂温泉につかり裸の交流が



(第1日の研修会)

第10回の東海3県博物館協会交流研修会が、紅葉のたよりもチラホラと聞かれはじめた、10月24・25日の両日、下呂町を中心に開催されました。

(研修会日程)

第1日 10月24日(木)

- 13:00～13:30 受付(下呂町民会館)
- 13:30 開会
- 13:30～14:00 会長・来賓挨拶
- 14:00～16:00 発表・討議(各40分)

テーマ 「博物館機能の近代化」

- 三重県 志摩マリンランド飼育課長
大久保修三氏
- 愛知県 常滑市民俗資料館学芸員
中野 晴久氏
- 岐阜県 内藤記念くすり博物館長
青木 允夫氏
- 16:00 閉会・諸連絡
- 16:10～18:00 宿泊所(しらさぎ)
へ移動・入浴
- 18:00～20:00 懇親会
- 20:00～ ? 自主交流研修会
(各部屋・露天風呂)

第2日 10月25日(金)

- 8:30 宿泊所出発(バス)
- 8:40～9:30 山岳考古館・峰一合
遺跡見学
- 9:40～11:40 合掌村・竹原文楽見学

- 11:50～12:10 昼食(萩原町竜駿庵)
- 12:10～13:30 禅昌寺・歴史民俗資
料館見学
- 13:40～14:00 下呂駅・下呂町民会
館にて解散

愛知県13名、三重県14名、岐阜県19名、計46名が参加された交流研修会でした。天下の名泉下呂温泉のなせる技か、地元下呂町・萩原町の各教育委員会の方々の真心こめた対応・接待のおかげによるものか、はたまた、発表内容の素晴らしさによってか、参加された方々が口々に、「とても有意義な会でした」「楽しく、かつ勉強になりました」と感想を述べられた2日間のほんの一端を紹介いたします。

「博物館機能の近代化」というテーマで、3つの発表がありましたが、日頃の実践をふまえ、バラエティに富み、含蓄の深いものでした。博物館にとって大切なのは、「モノ」であると同様に「ヒト」、さらには「ヒトとヒトとの交流」であることを強く印象づけられました。

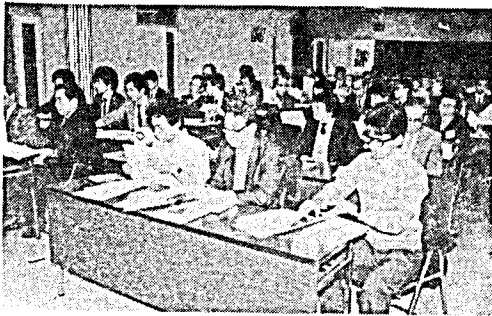
三重県の志摩マリンランドの大久保氏は、スライドを使いながら水族館の展示方法を紹介されるなかで、来館者が少しでも魚と親しくなれる為の工夫・気くばりを示されました。ガラス面をできる限り壁面と一体化し、暗いのでき窓式の従来のものとは異なること。解説のキャプシ

(第2日 バスにて見学地へ)



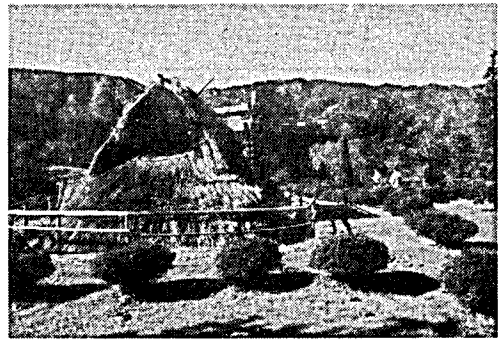
音はなかなか読んではもらえぬことから、スピーカーシステム（館内13ヶ所）による解説を導入していること。ただし、押しボタン式でわずか1分～2分の解説であるのに、最後まで聴く人は少なく、入館者の数により音量の面で対処できない等、機械化＝近代化という単純な図式にはあてはまらないようです。自作のVTR番組により、普段見られぬ魚の生態を紹介したり、放送局への情報提供、さらにはNTTキャプテンシステムによる宣伝等、新たな情報社会に対応しての近代化にとりくみ、ワープロ利用の化石台帳についても発表していただきました。

愛知県の常滑市民俗資料館の中野氏は、昨年の暮から今夏に至る約8ヶ月間の「とこなめ国際やきものホームステイ（I.W.C.A.T）」の実践をふまえ、近代化という言葉のもつ意味からまず発表を始められました。「近代化＝西洋化＝アメリカナイズ」という考え方が、我々の頭にこびりつき、アメリカに近づくこと、米語が



（熱心に聞く参加者）

話せることが国際化につながるという認識を持つにいたっているのではないだろうか。しかし8名の海外参加者を得て、47人の実行委員、講師、通訳など60人のボランティアが参加して実現された、(I.W.C.A.T)において、痛感したのは、自己を相手に伝えることこそ国際化の中核であるということ。自己文化と異文化が交流し合って初めて、国際化となり近代化へとなっていく。博物館＝常滑民俗資料館が(I.W.C.A.T)で果たした役割は、自己文化＝地域アイデンティティを發揮し、常滑を海外からの8人のお客さんのみならず、常滑の人々に知らしめたことにある。私たちは身の回りのこと、地域のこ



（峰一合遺跡）

とをあまりにも知らぬままにすごしているのではないだろうか。地域と結びつき、自己の文化を認識する核となり、参加する博物館となるのが、博物館機能の近代化と言えるのではないかとの考えを示されました。

岐阜県の内藤記念くすり博物館の青木氏は、コンピューターを導入しての、資料受入、図書受入・管理、博物館関係者名簿について発表されました。くすり博物館の性格、特殊性から来館者との交流、話し合いをより重視していくため、事務作業の能率化、レファレンス業務の効率化をねらったコンピューター利用の実際を紹介して下さいました。データーを打ち込む現段階では、2名のスタッフでは重労働であるけれども、自力で入力することにより、正確なデーターとなり、2万7千点をかぞえる図書の整理は今年度末には完了するとのことでした。

テーマである近代化を極めて広い観点から、それぞれに発表していただきましたが、そこには常に「ヒト」がいて、「ヒトとヒトとが、いかに交るか」という問題がからんでいました。今回の3県交流研修会そのものが、博物館の近代化への第一歩であるとの感を強く持ちました。

あくる25日は快晴。峰一合の縄文遺跡から、合掌村・竹原文楽・禅昌寺へとめぐり、見学研修を重ね、お昼は竜駿庵名物笹ずし定食に舌鼓をうちました。

「来年は三重県でお会いしましょう。」を別れの言葉に、2日間の3県交流研修会は成功のうちに閉会となりました。

≡≡≡ 県内ニュース ≡≡≡

「岐阜県の博物館」 刊行



副題に、「美濃と飛騨の文化を訪ねて」とあるように、県下各地の博物館及びその類似施設等を紹介した上記「要覧」が、やっと刊行されました。大変遅刊いたしましたことを、要覧編集委員会より、深くおわび致します。

書店で入手してください

会員館園等への配布につきましては、今春の総会時に間に合いませんでしたので、引換券の葉書を郵送済みです。お近くの書店にて、大至急引換えてくださるようお願いいたします。なお、事務局でもお引換えいたしますので、岐阜県博物館へご来館の折には、事務局までお申し出ください。

委託販売のお願い

会員館園等で、入館者の方々へこの要覧を広く普及していただけたところがありましたら、岐阜県博物館協会事務局まで、お申し出ください。あまり少数では、郵送費その他で不経済ですので、20冊、30冊、50冊等の単位で委託販売をお願いしたいと考えています。納金その他の詳細につきましては、委託販売の申し出をいただいたときに、打合わせさせていただきます。

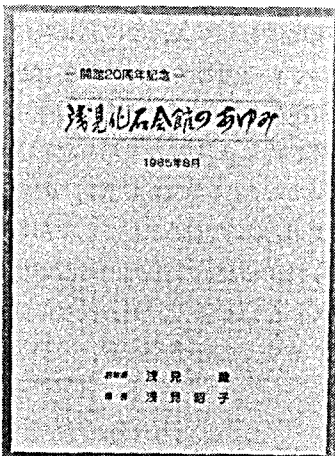
訂正事項はご連絡を

要覧編集委員会では、最大限の努力をして編集いたしました。各館園等におかれましては、ご不満な点や誤植等も多々あるかと思っております。ことに、略地図につきましては、パンフレット等を頼りに作図したりで、しかも仕事が遅れ急

がせましたので、不明確な点も多いと思います。訂正事項等お気づきの点は、できるだけ早いうちにご連絡ください。第二版発行の折には改訂させていただきます。

浅見化石会館のあゆみ 刊行

浅見化石会館では、開館20周年記念として、表記の冊子、B5判、24ページを刊行されました。浅見化石会館のあゆみとして、前館長故浅



見薫氏の出生から、昭和60年6月にいたるまで、化石採集、展示会、博物館活動等の足跡が、日誌として記録されています。

他に、展示会一覧、館の内容・活動等

が紹介された各種出版物の一覧、TV、ラジオ報道番組一覧、浅見レジンフォッシルのあゆみ、グループ見学者一覧、表彰及び感謝状一覧等が記載されています。入手希望等お問合わせは、

〒502 岐阜市長良梅子 2972-2 浅見昭子
TEL 0582-31-3997 へ

編集後記

◎三県博協の交流研修会のようなすを速報しました。一年一年充実発展し、より多くの方々が結集、実践交流、ヒトとヒトのつながりの場となることを念じています。

(S.O)

◎なかなか原稿が出来上らず、今回の発刊の遅れの責任を痛感しております。次回は遅れないようがんばります。(S.A)

◎下呂町での交流研修会に続き、熱海MOA美術館で開かれた、第33回全国博物館大会に参加しました。詳細は次号で。(M.I)